若いお母さんたちへ

娘の幼稚園就園を考えて

河合　聡子

「四歳になったら幼稚園に行く」いろいろ考え迷ったのですが、娘のこの言葉で、昨年の十月、私立幼稚園の入園願書を出さないことにしたのでした。昨年の九月に三歳になった娘は、三年保育であればこの四月から幼稚園にいけるのですが、それは見送り、二年保育に決めたつもりでした。それでも、私の中では迷いがあり一か月後、結果的には抽選に外れた国立の幼稚園には願書を出しました。

私はこの一か月間だけではなく、その後も迷い続けました。四歳になったら、というのは、単に今よりも先の時間を意味しているのだと思い、少し時間をおいては「幼稚園に行くの？」と聞いていましたが、娘は、四歳になってから、という結論を変えませんでした。行きたくなったら行かせることにしよう、年度の途中でも、娘が行きたいと言い、その時に受け入れてくださる所があるなら行かせようという気持ちになったのは、年が明けてからです。

娘の幼稚園就園について今までどう考えてきたかを振

り返ることでこれからの娘との時間がより豊かになったと感じています。

一、断乳以前

やっとつわりもおさまった頃のことです。担任していたクラスの母親たちと会った時、どの幼稚園に入れるのかと数人の方から聞かれました。勤めていたY幼稚園から、私の住まいがそれほど遠くなく、通園可能だからでしょう。元の職場に入れるかどうかも興味があったのだと思います。

とても印象に残ったのは、私と同じ東京都X区に住む一人の母親からの、やはり幼稚園の教諭をしていた友だちが自分の子どもを就園させる際、X区には納得できる幼稚園がなく、保育園の方が良いということで再就職したという話でした。どんな見方をしたのかはわかりませんが、X区にいい幼稚園がないとはっきり言われたことで、その後他の区の幼稚園に目が向くきっかけになりました。

保育園に入れることについては殆ど関心もなかったのですが、娘が生まれて間もない頃、保母をしていた私の母に、娘を保育園に入れた方がいいときっぱり言われたことがありました。母の保育を見たことはありませんが、研究熱心ですし、日々の話からも、私など及ばない素晴らしい保育者であると思っていましたので、子どもが家庭にいるよりも伸びやかに生きられるという確信を持っていたのでしょう。私としても頭から拒否するつもりはありませんでしたが、娘と暫くは一緒にいたい気持ちが強く、笑って済ましていました。

娘が一歳を過ぎた冬の初め、母の薦めるZ保育園が土曜日の午前中に園を開放してくれていることを知りました。幸いこの保育園は私の家から十五分程で行ける場所にあり、娘を連れてさっそく訪ねました。

案内された部屋は、日当たりがよく木の床の温もりが心地好い所でした。子どもの為の部屋がここにある、それは、家ではとても望めないものでした。そこに居る園児ひとりひとりがとても可愛く、保母さんたちに、大事

にされていることが伝わってきました。

保育園にいる間、八時間（～九時間半）を常に保母さんに見守られながら生活している。給食も、プロの栄養士さんがいるのですから当然ではあるのですが、豊富な食品と調理方法、それがすうーっとでてくるのに感動しました。何しろ私は料理が不得意な上に、娘を一人にさせておくことができず、眠っているときにしか台所に立てない、という毎日を送っていたのです。保育園での生活が羨ましくもあり、ここの保母さんにも入園を勧められましたが、まだまだ母乳を飲んでいましたし、人見知りも強く、娘にとっては私と一緒にいるのがいいと思っていました。そして何よりも手元に置いておきたいという私も気持ちは変わりませんでした。土曜日の園庭開放以外にも、人形劇の会や、給食の試食会などに遊びに行かせていただいた後、体調を崩したのをきっかけに足も遠のいてしまったのですが、娘との一日の生活をつくっていくとき、この保育園の保育が意識されるようになりました。

私の住むX区にはいい幼稚園がない、という思いと、Z保育園の保育への憧れを抱きながら、娘の二歳の誕生日を迎えることになりました。

おいしい母乳をせっせと与え続けて断乳し、さあ、次は、幼稚園はどこがよいかしら、と探し回る—私が実行していた母乳育児相談室で目にした文章です。私と同じ母乳育児をし、既に断乳していた先輩ママが書いたものでした。今では、もっと力を抜いて気を楽にして、と応援してくれたのだと思えるのですが、断乳を間近に控えていたころは、言い当てられて苦笑する一方で、良い幼稚園を選ぶのは当たり前なのに、皮肉を言われているように感じていました。

断乳したのは娘が二歳一か月になった十月の末ですので、私立幼稚園の願書配布までに一年近くありました。

二、二年保育か三年保育か

実際には、断乳後、かなり長い間、娘が幼稚園へ行け

るとはとても思えない時期が続きました。

生後八か月の健康診断でも、体重を測るのに私から体が離れると大きな声で泣いて、お医者様にどうしたの？と聞かれ返事に困ったことを初めとして、人見知り、場所見知りの激しさには、当たり前とは思えないこともありました。断乳直後も、五組の親子が参加したかけっこで、一人で走れず母親と手をつないでいたのは娘だけでした。

翌年の五月から二か月余り、週に一度、母子講座に参加しました。アコーディオンカーテンで仕切られた一室で、親はさまざまな先生から二歳児についての話を伺い、子どもは専門の保育者に遊んで頂くという形式でした。私の最大の関心は、娘がどんな風にその場で遊ぶのだろうかというところにありました。初日、当然の如く、私の手を握ったまま終わりの時間まで一緒に遊びました。九回のうち一日休みましたが、その間、だんだん慣れるというより、ある時は私から離れ、ある時は私が講師の方に視線をむけることも拒んだりするという状態でした。親から子どもが離れることが講座の目的ではなかったので私としても焦ることはありませんでしたが、娘はまだ離れないということを再認識しました。

私が勤務していたY幼稚園に入れていただくことも考えていたのですが、娘にとっては大きな障害があったのです。二歳になったばかりの秋、運動会を見にY幼稚園へ行った時、玄関で急に泣き始めました。原因はからくり時計でした。一時、二時、三時というように毎正時ごとにその数字のかかれた小さな部屋から人形が出てきて音楽に合わせ踊ります。私たちが玄関に居たのはちょうど正午で、その時には一から十二までのすべての人形が賑やかに踊ったのでした。私から見ればとても可愛い人形なのですが、娘にはしがみつかずにはいられない怖いものだったのでした。そして、このからくり時計の怖さがそのまま幼稚園に対する怖さになってしまったのでした。娘にとっては幼稚園と言えばY幼稚園であり結果として幼稚園に行くことはとても考えられない状況でし

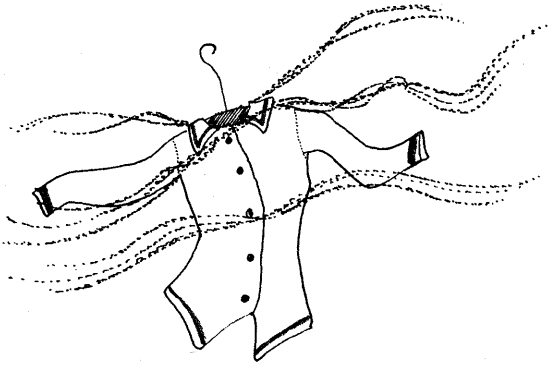
た。

こんな風でしたから、三年保育は無理だと思ってのんびり構えていたのですが、初めてからくり時計に出会ってからほぼ一年後、「もう、お姉さんだから大丈夫」と自ら宣言し、本当に平気でY幼稚園のからくり時計を見られたのでした。いつも遊んでいる公園でも同じ年齢の子どもたちの親同士で幼稚園について具体的な話が出ており、三、四人がY幼稚園を希望していることを知りました。そうなると娘の口から、自分もY幼稚園に行くという言葉が出るようになり、私は慌てました。

同じ頃、大好きな友だちが通う保育園の運動会でお菓子をもらえる競技に参加し、とても喜び、保育園へ行くと言い出しました。私が娘が行くとしたら幼稚園であることを話すと「しょうちゃんは保育園、恵理子は幼稚園」とはしゃいでいました。

三、幼稚園選び

娘の三年保育を見送ろうと思っていた時も、他のお子さんの幼稚園のことで意見を求められることがたびたびあり、自分の理想の幼稚園について話すことがありました。子どもと一緒にいることに喜びを感じる先生に、毎



朝迎えられられ、見守られ、応援されながら子どもが自分の一日をつくり上げられるように過ごせる幼稚園。個性を大切にされ集団の育ちも豊かになされる幼稚園。私はいつもこんなふうに答えていました。極々形式的なことでは、母親が作ったお弁当を持って、徒歩で通園できる幼稚園。堅苦しい制服がない幼稚園。園庭が土で緑豊かで雑草摘みもできるような幼稚園。勿論家庭の事情によって決めることですし、相手が決めた幼稚園に対して批判したこともなく、あくまでも私の好きな幼稚園、理想の幼稚園として聞いてもらっていたのです。

なるべく理想に近い幼稚園がいいと思う一方で、一番近い幼稚園がいいかもしれない、と考えが変わったこともありました。家庭での教育が基本であり、そこがしっかりしていればどの幼稚園であってもいいと思ったのです。しかしすぐに揺らいでしまいました。母子講座で一人の講師のかたに、教師によって子どもの伸び方が全く違うとわかったから、先生を育てる側にまわった、という自己紹介を聞いたからです。教師によって違うというならば、幼稚園も慎重に選ばなくてはならない、そう思い直したのです。

娘が幼稚園に行きたいと言い始めた時には、既に入園願書の配布が始まっていました。迷っている時間はありません。まっ先に思ったのは、Y幼稚園には行けないということでした。願書配布直前にY幼稚園の運動会で、担任していた子どもの妹や弟を連れた父母に会い、娘と同学年で三年保育を希望していると聞いた時、ここには来られないと思いました。親としての私の言動が元職員のそれと受け取られるとしたら、先生方に迷惑をかけることになりかねないし、自分も窮屈ではないか、と考えたのです。

そして、最終的に願書を手にしたのは、環境も良く、多少時間はかかりますが、徒歩で通うこともできるJ幼稚園でした。私がY幼稚園に勤務していた時から講習会などでお邪魔させて頂いていた幼稚園です。そこには私が知りあいの先生が数名おられます。知っている先生がいらっしゃることで、私自身が安心していられます。何

より私が尊敬していて大好きな先生がいらっしゃることは、大きな魅力です。幼稚園の教育方針や、先生同士の育て合う姿勢もとても大事ですが、先生ひとりひとりの資質が大きな力を持っている、という思いが強かったのです。願書をいただいたあと保育室に通され、初めべそをかいていた娘もすっかり遊ぶ気持ちになり、J幼稚園に楽しい印象を持たせていただいて帰ることができました。

四、やっぱり行かない

ほっとしたのも束の間、三年保育決定は白紙に戻ることになりました。J幼稚園に伺ってから二日後、食事をしながら、「ママと幼稚園まで一緒に行って、恵理子は先生やお友だちと遊ぶのよ」と軽い気持ちで話したのです。「ママは?」と聞かれ、「家で待っていてお迎えに行くのよ」と答えると「ママと一緒に遊ぶ」と言うのです。娘にとっては幼稚園とは、母親と一緒に遊ぶ場所だったのです。そして冒頭の「四歳になったら行く」ということになったのでした。

初めはなくことがあっても、きっとすぐに慣れるに違いない、と思ってみたものの、三年保育で入園した直後母親から離れがたくて泣いている子どもの姿が思い出されました。

二度目に三歳児のクラスを担任した時、入園式翌日にひとりで保育室に来られたのが十六人中、五人程でした。玄関で母親と別れても、「お母様が悪いの、私は一階が良かったのに」と泣きながら手すりに寄り掛かるように、漸く階段を登って来る子ども。母親に、今日は一人で来るからと約束してきたのね、と言われながら、涙を浮かべている子ども。私自身の力不足をさらけ出すようで恥ずかしいのですが、一度目の三歳児のクラスとの違いに戸惑ったものでした。

四月になれば娘も変わっていると思いながらも、十一月初めの入園考査で子どもが親と別れる時間があるとしたら、それは幼稚園との出会いが辛い思い出として残りはしないか、慣れれば大丈夫という言うけれど慣れるま

でのその子どもの不安を無視できないのではないかと思いました。

まだ、離れる時ではない。娘が行きたいと言うまで待つことにしたのでした。

五、〝行かない〟から見えてきたこと

国立の幼稚園の抽選に外れた直後は、幼稚園に行けば経験することを私が代わってやらなければ、という気持ちがとても強くなっていました。幼稚園に行くことを基準にしていたために、行かないことになったら、それを補わなければならないという思いでした。二か月近くその思いを背負っていました。ふと、自分は娘に、どう育って欲しいと思っているのかしら、と問うていました。伸びやかに、自分のしたいことをどんどん実現し、思いやりのある優しい子になって欲しい。卑屈になることなく自分も大事にできる子になって欲しい。こういう希望が、幼稚園にいくことで叶えられると思い込んでいたところが大いにありました。家庭での教育が基本にあって、それを補助する形で幼稚園があることを忘れていたことに気付きました。

幼稚園に行かないから何かをしなくてはならないという考えから解放され目の前が明るくなりました。

同じ年頃の子どもと遊ぶ機会を積極的に作ることは今より大事になります。Z保育園にも遊びに行きます。その他は洗濯物を干したり、外したり、たたんだり、料理をしたり、掃除をしたり、草花を植えたり等日常の小さなことをするのは今まで通りのことです。博物館、美術館、動物園、人形劇へは友だちをさそっても行けるでしょう。今まで通りの毎日をほんの少し背筋を伸ばし、丁寧に送っていけばいい。こう、ここまで来るのになんと遠回りしたことでしょう。娘の「四歳になったら」という言葉は鈍感な母親を刺激するための神様からの贈り物のように思えます。

（はるにれの会）